

国史跡末松廃寺跡発掘調査現地説明会資料

令和3年11月20日(土)

1 調査の概要

- 調査期間：8月から11月
- 原因：国史跡末松廃寺跡の再整備事業
- 目的：金堂南西隅の調査

令和3年度は金堂^{こんどう}の発掘調査を実施しています。金堂は仏像を安置する古代寺院の中心的な建物で、昭和41年から42年に実施された第1期発掘調査では、7世紀後半に建てられた建物の周りを取り囲む溝や、大量に捨てられた屋根瓦、8世紀の中ごろに再建された金堂に伴う石敷きを発見しましたが、建物の詳細な構造などが不明でした。

2 令和3年度の発掘調査成果

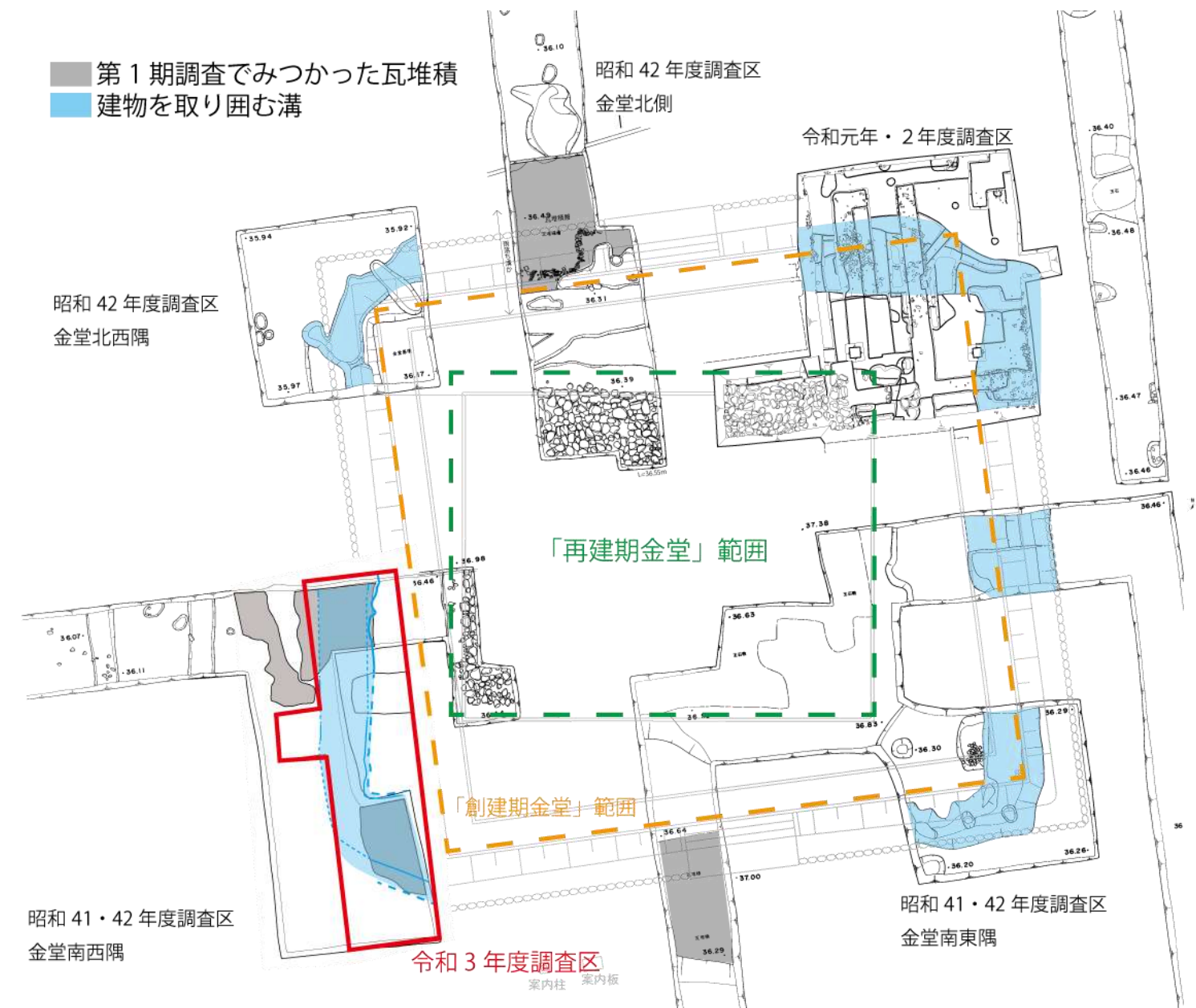
- 大量の瓦を発見しました

金堂の屋根に葺かれたと考えられる大量の瓦を発見しました。瓦は能美市の湯屋町で焼かれたことがわかっており、建物の周りを取り囲むようにみつかっています。

- 金堂を取り囲む溝の南西隅を確認しました

金堂を取り囲む溝は、幅 1.5 から 2 メートル、深さは最大約 40cm で、調査区の南東から L 字状に曲がり北に向かって伸びています。第 1 期調査ではこの溝は雨水を排水するための溝（雨落ち^{あまおち}溝^{みぞ}）と考えられていました。しかし令和 2 年度から 3 年度にかけてこの溝の再調査を行った結果、この溝が一般的な雨落ち溝と比べて幅広く深いものであることが分かりました。

どのような理由で建物の周りを取り囲む溝が掘られたのか、今後検討する必要があります。



金堂調査平面図（縮尺 1/200）



発掘調査の様子



調査区北側でみつかった大量の瓦（北から撮影）



奈良県唐招提寺金堂（国宝）の雨落ち溝



末松廃寺跡復元模型（北から）
右側が金堂

【末松廃寺跡史跡公園の注目ポイントをご紹介】

末松廃寺跡は昭和 14（1939）年に国史跡に指定されたのち、昭和 46（1971）年に史跡公園が完成してから今年で 50 年となりました。この公園の中には、末松廃寺跡の歴史を今に伝えるシンボルが存在します。

1. 塔心礎

現在塔の中心に据えられている巨大な石は、塔の中心の柱（心柱）の基礎におかれた石（塔心礎）です。長辺 2.2m、短辺 1.6m の巨大な石で、手取川から運ばれた石が使われたと考えられています。明治 21（1888）年に近隣の末松大兄八幡神社^{おおえはちまんじんじや}に運ばれ手水鉢として使われていましたが、公園整備を機に現在の場所に戻されました。

この塔心礎は劣化が進んでいたため、平成 26（2014）年度には樹脂を染み込ませ補強を行いました。

2. 「史蹟末松廃寺跡」の標柱と看板

公園北側の入り口付近に立つ標柱と屋根がつけられた看板は、史跡に指定された昭和 14 年頃に建てられたものです。公園整備以前は史跡内を横断していた県道の際に建てられていましたが、公園整備に伴って現在の位置に移動されました。

3. 「金堂趾」「塔趾」の標柱

金堂と塔の南側に、それぞれ石碑が建てられています。これらも、昭和 14 年の史跡指定直後に建てられたもので、公園整備時に現在の位置に移設されました。



公園整備前の標柱の様子



昭和 41 年の発掘調査写真に写る「塔趾」の石碑

末松廃寺跡を含む野々市市の文化財を「野々市デジタル資料館」で紹介しています。右の QR コードよりアクセスしてぜひご覧ください。

